

福井が舞台の

「大河ドラマ

」を

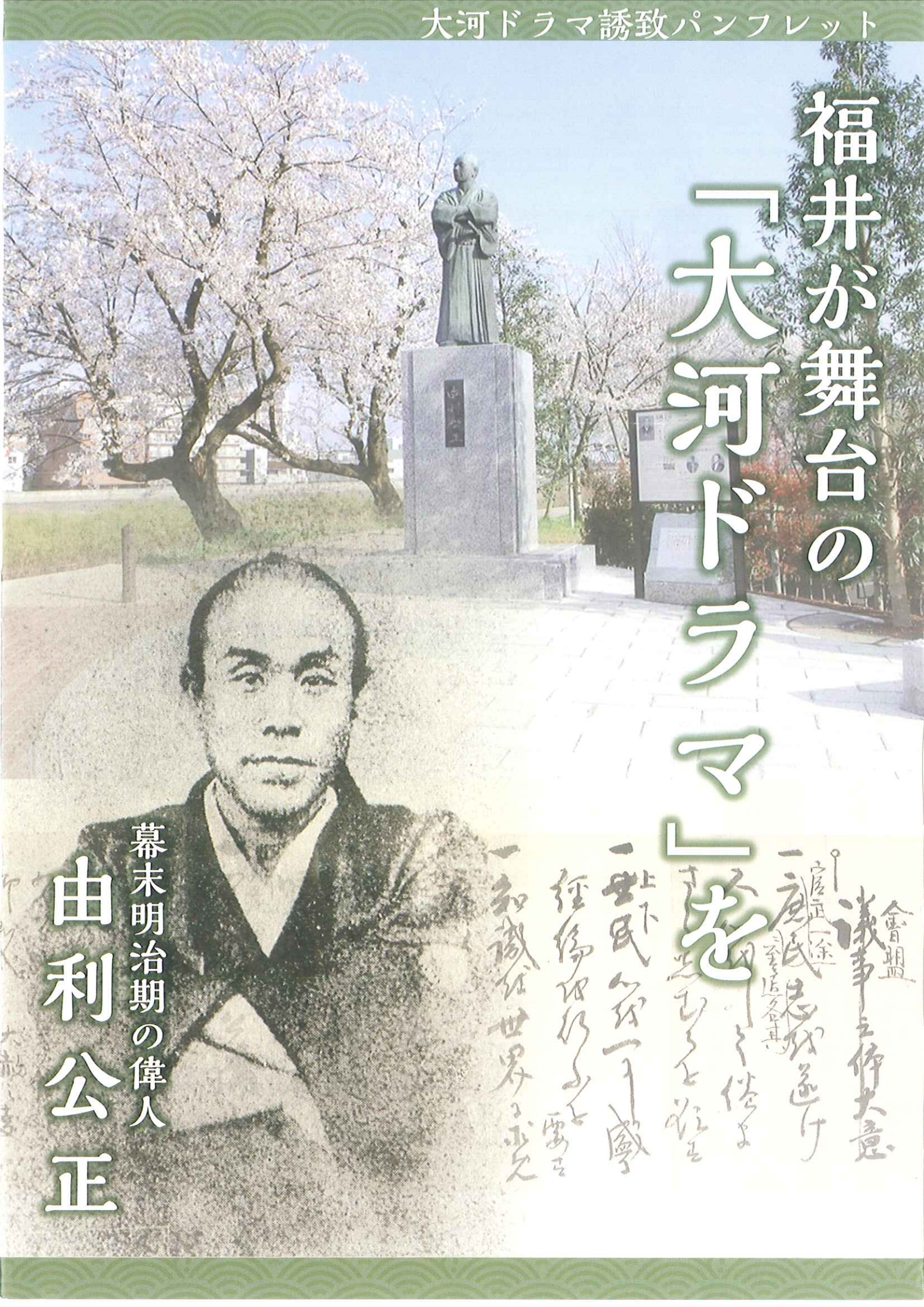
金會盟
義事之偉大意

一 慶應義塾
志願者

一 上下
民衆

一 経緯
の
事

一 知識
の
世界



幕末明治期の偉人

由利公正

由利公正(三岡八郎)をめぐる

1 由利公正の人物像



へっつい(イメージ)

1 新型「へっつい(かまど)」の考案者

幽閉蟄居を命ぜられている4年4か月の間に、かつて葦山反射炉で学んだ技術を応用し、炎の熱を逃さず、土の中に埋めることで保温力を増す新型「へっつい」を考案。従来の「へっつい」よりはるかに燃料が節約でき、しかも火力が強い。考案された「へっつい」は、昭和10年ごろまで「三岡へっつい」とよばれて福井県下で用いられていた。(小説「炎の如く」、「経綸のとき」による)



2 乗馬の名手

陣傘陣羽織に着飾った青年藩士が、馬にまたがり城下を疾走する中、町民や農民の若者が、鐘や太鼓をならして馬を威し、行く手を阻み、勇猛果敢な攻防戦を繰り広げる福井藩名物の「馬威し」に19歳で見事優勝。松平春嶽の日に留まる。(小説「炎の如く」、「経綸のとき」による)

馬威しの様子。独特の衣裳と装具で馬の前に立ちはだかる「名物男」(中央)大勢の見物客が見入っている

3 文武両道

剣道は真影流、槍は無辺流、西洋流の新式砲術それぞれ免許皆伝の腕前。馬威しの勝利をねたんだ上級武士の師弟数名から切りかけられた際も、竹竿をやりに見立て撃退する。

日頃の武術の鍛錬の結果、剛健な体力を身に付ける。ペリー艦隊の2度目の来航の際、福井藩が先遣隊を江戸に出した際、昼夜兼行わずか3日間で全道程を踏破する。

また、幕末を代表する歌人橘曙覧の門下生として、短歌も学んだ。(小説「炎の如く」、「経綸のとき」による)

4 信念や信条をあくまで貫く頑固者

明治元年、古くからの金貨通用の地である江戸(東京)では太政官札発行は無理だとして、反対していた江藤新平に対し、由利は、議論を拒否したら負けというルールを設け、立会人を置き、朝から夕刻まで、連日7日間江藤と議論を戦わせた。8日目に江藤は会場に姿を現さず、山利の勝ちとなった。

5 愛妻と幼馴染み

8歳年下の「タカ」は由利が49年連れ添う愛妻。また、坂本龍馬との会談場所となった糞屋(たばこや)旅館の娘「なみ」とは幼馴染みとして生涯の付き合いとなった。(小説「経綸のとき」による)

由利公正の生涯

和 暦	西 暦	年 齢	主 な 出 来 事
文政12年	1829	1	11月11日、福井城下(福井市)で、福井藩士三岡義知と幾久の長男として生まれる(通称は石五郎、八郎)。
嘉永 4年	1851	23	福井に来た横井小楠の講義を聞き、学問を志す。
嘉永 6年	1853	25	父が亡くなり、家督を継ぐ(知行100石)。 江戸で大砲と鉄砲の修行をする。
安政 4年	1857	29	藩の大砲・鉄砲・弾薬製造の責任者となる。
安政 5年	1858	30	横井小楠の一時帰国に従って、中国・九州地方を視察する。 このころ、藩の制産方(産業・流通の担当)の責任者となる。
万延元年	1860	32	このころ、長崎に藩営の店を設け、オランダなどに生糸を輸出する。
文久元年	1861	33	産物会所が開かれ、藩の殖産興業に努める。 福井城下の足羽川に幸橋を架ける。
文久 2年	1862	34	財政の責任者である奉行となり、藩の政治をリードする。
文久 3年	1863	35	自宅で横井小楠、坂本龍馬と国の将来を語り合う。 藩内の対立により、自宅謹慎となる(～1867年)。
慶応 3年	1867	39	坂本龍馬と城下の苺屋(たばこや)旅館で新政について話し合う。 新政府の徴士参与となり、財政を担当する。
明治元年	1868	40	「議事之体大意」を執筆する(「五箇条の御誓文」の原案)。 日本初の全国通用紙幣 太政官札を発行する。
明治 2年	1869	41	参与を辞職し、福井藩知事松平茂昭の補佐となる。
明治 3年	1870	42	先祖の姓に戻し、由利公正と名乗る。
明治 4年	1871	43	福井藩庁大参事心得、その後、第4代(廃藩置県後、初代)東京府知事となる。
明治 5年	1872	44	東京銀座を復興し、レンガ街にする方針を打ち出す。 岩倉使節団に加わり、欧米の国々を視察する。
明治 7年	1874	46	板垣退助らと民撰議院設立の建白書(国会開設の要望書)を提出する。
明治20年	1887	59	華族に加えられ、子爵となる。
明治23年	1890	62	貴族院議員となる。
明治27年	1894	66	有隣生命保険株式会社を設立し社長となる。
明治42年	1909	81	4月28日、東京で亡くなる。

長崎、横浜に福井のアンテナショップ

長崎・横浜

由利は長崎に四度出張している。安政5年、物産を興し通商貿易を行って収入を図るよう中根雪江や橋本左内に働きかけ、貿易資本の確保と貿易状況の視察を建議し採用される。

その後長崎に出張し、唐物商の小曾根乾堂の協力を得て、浪ノ平に越前蔵屋敷を設けた。その後、長崎江戸町に福井屋が開設され、そこを拠点に生糸等の輸出が行われる。同じように横浜にも出店が設けられ、販路開拓が図られた。

紙幣発行のため、京都、大坂で資金集め

京都・大坂

明治新政府は徳川慶喜追討のため、御用金(会計基立金)を集める必要に迫られ、由利がその責任者となる。明治元年、由利は京都の大商人に5万両、大坂の大商人に同じく5万両の調達を命じる。計10万両の御親征費が調達される。

その後、紙幣の発行により産業振興を図ろうとした由利は、まず大坂でその準備に入る。同年5月には紙幣発行の日が決まったものの、反対論が根強かったため、由利は、「私は覚悟した。(発行されなければ)二条城に保管してある金札に火を付け、自刃する。」と訴え、予定通りの発行にこぎつけた。

知事公舎も燃えた大火で一念発起

東京

明治5年2月26日、和田倉門内兵部省から出火し、銀座、京橋さらに三十間堀から築地まで燃え広がり、5千戸、28万余坪を焼き尽くす大火となった。由利の公舎も類焼した。この火事をきっかけに、由利は東京不燃化計画を作成し、実現を図った。

由利は、当時のニューヨークやロンドンなど、国際都市の目抜き通り並みに銀座大通りの幅員を45.5メートルにすべきだと主張したが、大蔵省側の反対にあい、27.3メートルの拡幅となった。



煉瓦銀座之碑(銀座一丁目交番前)



碑文(拡大)